

マズローの自己実現論の全体像について

石 田 潤

自分の能力や性質を存分に発揮し、より自分らしくなることを、心理学では「自己実現」と呼んでいる。自己実現については、ゴールドシュタイン、マズロー、ロジャース、ユングらが、それぞれの理論の中で取り上げて論じている。その中で、自己実現に関して最も多くのことを論じているのはマズローである。自己実現に関するマズローの理論の中でよく知られているのは、いわゆる「欲求階層説」である。これは、人間の持つ主要な欲求として、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求、という5つの欲求を挙げ、この順に下から階層をなし、この順に発達が進行し、下位の層の欲求が満たされることによって上位の層の欲求が発達していく、とするものであり、自己実現の欲求が最上位の欲求として位置づけられている。この理論は、欲求の発達論として、また経営学の基礎となるモチベーション論の1つとして、多くの人に知られている。

さらにマズローは、この欲求階層説以外にも自己実現に関して、パーソナリティ、教育、創造性、仕事、価値などさまざまなテーマについて論じている。しかし、それらは必ずしも体系的に論じられているわけではなく、しかも各論が散在しているため、マズローの自己実現論としての全体像が分かりにくくなっている。

そこで本稿では、マズローが自己実現に関して論じているさまざまな事柄を整理し、マズローの自己実現論の全体像を描くことを試みる。

1. 自己実現の欲求

自己実現の営みを駆動するのは、自己実現の欲求である。上述したように、自己実現の欲求は、人間の持つ主要な欲求である生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求の中で、最上位の位置を占めており、生理的欲求を初めとする4つの欲求がそれぞれある程度満たされることによって発生してくる（「この欲求は通常、生理的欲求、安全欲求、愛の欲求、承認の欲求が先立って満足された場合に、それを基礎にしてはっきりと出現するのである。」（『改訂新版・人間性の心理学』p.72））。

ただし、下位の欲求が必ずしも完全に満たされることが必要であるわけではなく、また上位の欲求は一気に生じるのではなくて、徐々に生じてくる（「一つの欲求は、次の欲

求が現れる前に100%満たされなければならないかのような誤った印象を与えることになる恐れがある。実際には、我々の社会で正常な大部分の人々は、すべての基本的欲求にある程度満足しているが同時にある程度満たされていないのである。……優勢な欲求が満たされた後に新しい欲求が現われるということについて述べると、この現れは突然一足とびの現象ではなくて、無からゆっくりと徐々に現れてくるのである。」(『改訂新版・人間性の心理学』p.83)。

また、自己実現の営みには、自己実現の欲求以外の欲求も関わっている(「基本的欲求が、ある行動の排他的、唯一の決定因であると考えるべきではない。……言い換えれば、大部分の行動は重複した決定因をもち、あるいは複数の動機づけをされているのである。どんな行動も、そのなかで基本的欲求の一つだけでなく同時にいくつか、あるいはそのすべてがかかわって決定される傾向がある。……個人の一つの行為を分析し、その中にその人の生理的欲求、安全の欲求、愛の欲求、自尊心の欲求、自己実現の欲求の表われを見い出すことは可能である。」(『改訂新版・人間性の心理学』p.85))。

したがって、自己実現の営みは、自己実現の欲求を中心にして、それ以外の欲求も関わりながら成されていると言える。

2. 自己実現とパーソナリティ

マズローは、自己実現について「自己実現を大まかに、才能、能力、可能性をじゅうぶんに用い、また開発していることと説明しておこう。このような人々は、自分自身を完成し、自分のできるかぎりの最善を尽くしているように見え、ニーチェの「汝自身たれ」という訓戒を思い起こさせる。彼らは自分たちの到達できる最も高度の状態へ達し、また発展しつつある人々である。」(『人間性の心理学』p.225)と述べ、このような基準に適用するとマズローが認めた自己実現的人間のパーソナリティ特徴を記述していった。マズローの著書『人間性の心理学』によれば、その特徴とは次のようなものである。

(現実をより有効に知覚し、それと快適な関係を保つこと)

- ・抽象、期待、信念、固定観念などにとらわれず、現実を正確に知覚し、現実の世界の中に生きることができる。未知のものや不確かなことがあっても快適でいられる。

(受容)

- ・自分自身や他の人々の人間性を、欠点も含めて、ありのままに受け入れることができる。

(自発性)

- ・行動が自発的であり、内面、思考、衝動などにおいてさらに自発的である。本質的、内

部的には因襲にとらわれないが、つまらないことで人を傷つけたり人と争ったりしたくないため、できるかぎり慣習どおりに振舞う。自律的な倫理規定を持ち、その規定に照らして重要と思えることのためであれば、慣習には従わないこともある。

(問題中心的)

- ・自分自身の問題よりも、自分自身の外の問題に強い集中を示す。何らかの使命や達成すべき仕事を持っており、それらは人類一般や国家一般の利益に関わる場合が多い。

(超越性——プライバシーの欲求)

- ・孤独でいても、不快になることはなく、平均的な人々よりも孤独やプライバシーを好む。
- ・高い集中力を持ち、極度の集中によって外部環境のことを忘れていたりすることがある。
- ・普通の人々からは、冷たい、俗物主義である、愛情が欠如している、友情がない、などと思われることもある。

(自律性——文化と環境からの独立)

- ・自然環境や社会環境からの独立性を持ち、名誉、地位、報酬、威信、愛、などよりも、自分自身の成長や発展のために、自分自身の可能性や潜在能力を頼みとしている。

(評価が絶えず新鮮であること)

- ・人生の基本的に必要なことを、繰り返し新鮮に、無邪気に、畏敬や喜びや恍惚感さえもって評価できる。

(神秘的経験——大洋感情)

- ・限りなく地平線が開けている感じ、エクスタシーと畏敬の感じ、非常に重要で価値あることが起こったという感じ、などを伴う経験によって力づけられている。強度の集中、無我状態、自己喪失感、自己超越感などのような、神秘的とも言える経験に至る場合もある。

(共同社会感情)

- ・人類全般に対して同一感や愛情を持っている。平均的な人々の欠点にいら立ったり、腹を立てたりしながらも、人々に同一感を感じ、人類を助けたいと真剣に願っている。

(対人関係)

- ・他者と深い結びつきを形成し、愛情、親密性、献身性を持って付き合う。そしてそれゆえに、友人の範囲はかなり狭い。
- ・偽善的でうぬぼれた尊大な人に対しては厳しい態度を持っているが、面と向かってそれを表明したりはしない。

(民主的性性格構造)

- ・階級や教育程度、政治的信念、人種や皮膚の色などに関係なく誰とでも親しくできる。同じ人間だからという理由だけで、どんな人にもある程度の尊敬を払う。

- ・自分に何かを教えてくれるものを持っている人からは、その人の性質がどうであれ、何かを学ぶことができることを知っている。そのような学習関係において、外面的威厳を維持しようとしたり、地位や年齢に伴う威信などを保とうなどとはしない。自分に何かを教えてくれるものを持っている人たちを本当に尊敬し、謙虚になる。道具や技術をうまく使いこなす人たちにも尊敬をささげる。

(創造性)

- ・健康な子どもの持つ純真で普遍的な創造性と同種の創造性を持つ。特殊な才能を持つ人に見られる独自性の高い創造性ではなく、すべての人間に生まれながらに与えられた可能性のようなものであり、その人が従事している活動に何らかの影響を与える。

(価値と自己実現)

- ・自己の本質、人間性、多くの社会生活、自然や物質的現実を哲学的に受容することによって、自然に価値体系の確固たる基盤を身につけている。この価値体系の基盤によって、現実との快適な関係、社会感情、満たされた状態、手段と目的との識別などがもたらされる。
- ・平均的な人々にしみこんでいる本質的でない道徳、倫理、価値ではなく、性別や年齢による差異、身分上の差異、役割上の差異、政治的差異、宗教上の差異などを受容できる価値体系を持っている。

(自己実現における二分性の解決)

- ・情と知、理性と本能、認知と意欲、仕事と遊び、義務と喜び、成熟と子供っぽさ、親切心と残忍さ、具象と抽象、自己と社会、内向的と外向的、能動的と受動的、男性的と女性的、その他のさまざまな対立性や二分性は解消され、相互に融合し合体して統一体となっている。

以上のほかにも「手段と目的の区別」、「哲学的で悪意のないユーモアのセンス」、「文化に組み込まれることに対する抵抗」、などに関する特徴が挙げられているが、それらも含め、マズローの示した特徴は、自己実現的人間のパーソナリティ面での到達点と見なすことができる。そしてこのようなパーソナリティ特徴が、心理学的観点から見て多くの望ましい面を持っていることは言うまでもない。

しかしながら、記述の中に含まれているように、自己実現的人間は「平均的な人々よりも孤独やプライバシーを好む」(超越性——プライバシーの欲求)、「冷たい、俗物主義である、愛情が欠如している、友情がない、などと思われることもある」(同前)、「友人の範囲はかなり狭い」(対人関係)など、対人関係においてあまり適応的とは言えない面も持ち合わせていることがある。よって、自己実現的人間は必ずしも社会的な基準に照ら

して望ましい人間や優等生的な人間であるとは限らないと言うこともできるであろう。社会的対人的に適応的でない原因の 1 つとして、自己実現の営みを優先する分、対人的な営みに消極的になってしまうことが考えられるが、いずれにしても、自己実現的人間がすべての面で模範的な人間となるわけではないと言える。

3. 自己実現の心的状態

マズローは、著書『人間性の心理学』で自己実現的人間の特徴の 1 つとして挙げている「神秘的経験—大洋感情」をのちに「至高経験」と呼び変えた。マズローの言う至高経験とは「至高経験という語は、人間の最良の状態、人生の最も幸福な瞬間、恍惚、歓喜、至福や最高のよろこびの経験を総括したものである。」(『人間性の最高価値』 p.125) というものであり、何かの活動に没頭しているときに得られる至福感に満ちた最高の心理状態のことである。

マズローは著書『完全なる人間』において、至高経験のありさまについて次のような特徴を挙げている。

- ・精神の統一性を感じる。すべての部分機能が互いに巧妙に組織化され、集中的、調和的、効率的に働く。
- ・自己を取り巻く環境構成素と深いつながりを持ち、自己でないものとの融合感を得る。周囲の他者との一体感を持ったり、創作物や鑑賞物と一体になったりする。いわゆる無我の境地になる。
- ・すべての能力が最善にかつ最高度に発揮される。能力の発揮を抑制することなく、能力のすべてが行為に投入される。
- ・努力や苦勞をすることなく、易々とことを進めていくことができる。
- ・自分が活動の主体であると感じている。自由な意志でもって自分の運命を開拓していると感じている。
- ・抑制、警戒心、恐怖、疑惑、自己批判、などから自由な状態にある。
- ・自発的に、天真爛漫に、自然に、自由に自己を表出する。
- ・創造的である。
- ・独自性、個性、特異性の極致にある。
- ・今ここの存在であり、過去や未来から自由であり、経験に対して開かれている。
- ・自分にとってより本質的な、精神内法則に従って行動する。
- ・欲求解消の目的のための手段としてではなく、行動そのもののために行動がなされる。

- ・ 詩的、神秘的、叙事詩的な表現が似つかわしい。
- ・ 究極性、完成性、完全性を持つ。
- ・ 遊戯性を持ち、幸福の喜び、陽気さ、愉しさに満ち溢れている。
- ・ 至高経験をもたらしてくれた運命、自然、人びと、過去、両親、世界、などに対する感謝の気持ちを感じる。

このような至高経験について、マズローは次のようなことを述べている。「だれでもなんらかの至高経験においては、一時的に自己実現する個人に見られる特徴を多く示すのである。つまり、しばらくの間、かれらは自己実現者になるのである。」(『完全なる人間』p.137)、「このような状態、あるいは挿話は、理論的にいってだれでも生涯のうちいつか訪れるものである。われわれが自己実現する人びとと呼んでいる人を区別するものは、平均人よりもはるかに何度も、また強く、完全に、これらの挿話的事態が生ずるとみられることである。」(『完全なる人間』pp.137 - 138)。

さらにマズローはのちに、「至高経験は、自己実現の瞬間的な達成である。それらは、購なうことも、保証することも、探し求めることさえできない恍惚の瞬間である。」(『人間性の最高価値』p.60)、「自己実現とは、完全に熱中し、全面的に没頭しつつ、無欲になって、十分に生き生きと経験することを意味する。青年のもつ自意識なしに、体験することでもある。この経験の刹那に、人間は、まったく完全に、人間になるのである。この瞬間が、自己実現の瞬間なのである。この瞬間こそ、自己が自ら実現しつつある時なのである。個々人として、われわれはすべて、時々まそういう瞬間を経験しているものである。」(『人間性の最高価値』p.56)と述べ、自己実現と至高経験を同一視するとともに、至高経験を誰もが経験することができるとしている。よって、たとえば音楽を演奏している時、スポーツをしている時、何かの趣味活動をしている時、仕事をしている時、読書をしている時、芸術を鑑賞している時、家事をしている時、育児をしている時など、どのような活動をしている時であっても、その活動に集中し、没頭することによって至高経験が得られ、自己実現が成されるのである。もちろん、集中の程度や没頭の度合いによって、至高経験の強さや自己実現の程度は異なってくるであろう。それでも、強さや程度の違いこそあれ、至高経験も自己実現も、誰にでも生じる可能性を持っている。そしてマズローは、自己実現する人と呼ぶか否かは、経験する至高経験の程度や頻度の違いに過ぎない、というのである。よって、先述の自己実現的人間のパーソナリティ特徴は、程度が強い至高経験を高い頻度で体験しながら人生を歩み、規模の大きな自己実現を達成した人たち、または達成しつつある人たちに見られるものと考えられるであろう。

4. 自己実現と教育

マズローの考える教育の最大の使命は、人の自己実現を支援することである。このことについて、マズローは次のように述べている。「教育はその人がそのなりうる最善のものとなり、その人が潜在的に深く蔵している本質を、現実にあらわすのを助けるべきである。」(『創造的人間』 p.65)、「(このような概念においては、) 教育の機能、教育の目標—人間的、人間主義的な、人間に関する限りの目標—は、最終的に、個人の「自己実現」、完全な人間になること、人類あるいは特定の個人が到達しうる最高の高さにまで成長すること、とされている。それは、平たくいえば、人間が自己のなりうる最高のものになるのを助けることである。」(『人間性の最高価値』 p.199)。

さらに、マズローは自己実現を支援することに関する教育の目標として、人生の価値や喜びを味わわせることを挙げている(『人間性の最高価値』 p.220)。そして、そのような観点から、マズローは特に、芸術教育の意義を高く評価する(「芸術、とくに私が述べてきたようなものは、..... それらが教育における基本的な経験にならなければならないと思う。この種の教育によってこそ、無限なるものや、究極的な価値を垣間見ることができると思うのである。この本質的教育は、美術教育、音楽教育、ダンス教育を核心にすることができよう。」(『人間性の最高価値』 p.211))。

またマズローは、芸術以外の教科においても、自己実現に寄与することは可能であると考えている(「数学もまた、音楽と同じように美的で、至高経験を生じさせる可能性をもっている。..... 歴史、(他の文化を学ぶ、という意味での) 人類学、社会人類学、古生物学、自然科学など、皆同様の可能性をもっている。」(『人間性の最高価値』 p.210)、「最上の教授法は、数学であれ、歴史であれ、哲学であれ、学生に、その学問のもつ美に気づかせるようにし向けることである。」(『人間性の最高価値』 p.224))。

芸術やその他の教科によって、その内容に含まれる美を味わい、価値に気づくことによって、人は至高経験を体験したり、生きる喜びを感じたりする。そのことが自己発見や自己実現につながり、そうして自己形成がなされていく、というのがマズローの教育観である。

5. 自己実現と創造性

マズローによれば、創造性は自己実現と重なり合う部分が大きく、場合によってはほとんど同じものと見なすこともできる(「創造性の概念と健康で、自己実現をとげつつある完全なる人間の概念とは漸次合体し、おそらくついには同じことになってしまうという

のが、私の感じである。」(『人間性の最高価値』 p.71))。

創造性に関して特に、マズローの理論において扱われているのは、創造的活動のもとになる閃きのような部分であり、マズローはこれを一次的創造性と呼んでいる。マズローは、作品を完成させていく過程においては、技能、時間、労力、努力、忍耐、などが求められるため、創造性とは別の要因が関わってくると考えたのである(「私の強調しているのは工夫やインスピレーションであって、完成された芸術作品や偉大な創造的業績といった立場から創造性を云々しているのではない。……一次的創造性や創造性のインスピレーション面は、そのインスピレーションの成果や発展とは区別されねばならない。なぜなら、後者の場合には、単に創造性ばかりでなく、まことに徹底した努力、半生を道具、技能、材料の勉強に費し、ついには、観察するものを完全に表現できるようになるというような芸術家の血のにじむような修養によるところも大きいからである。」(『人間性の最高価値』 p.73)、「われわれは、社会的に有益であるとしても、芸術や科学の完成された作品を創造性の実例として用いるべきではない。……これは完成された作品を基準として用いると、とかく、よい仕事の習慣、しぶとさ、鍛錬、忍耐、よい編集能力、というような創造性と直接関係のない、あるいは少なくとも創造性に個有のものでない特徴と混同することが極めて多いと考えられるからである。」(『人間性の最高価値』 p.120))。

そしてマズローは、創造性の源泉になっているのは心の深層部分であると考えている(「ここ一〇年ばかりにわかったことは、われわれが実際に興味をもつような創造性、すなわち、真に新しいアイデアの発生が人間性の深層に起源をもっているということである。」(『人間性の最高価値』 p.99))。マズローは、フロイトの理論を「無意識を単に好ましからざる悪でしかないと考えた」と批判し、「無意識は、創造性や喜び、幸福、善、人間的な倫理や価値自体の源泉である。」と主張している。

創造性を発揮する際の1つの契機となるのは、行っている活動に没頭することである(「……創造的な人間が創造的熱中のインスピレーションの段階では過去も未来も忘れ、ただその瞬間の中のみ生きるということである。彼は、現在のうちにまったく没入し、魅せられ、いま、この現前する問題の中にわれを忘れるのである。……この「現在のことで夢中になる」能力こそ、どのような創造性にとっても必要不可欠な条件であると思われる。」(『人間性の最高価値』 pp.75 - 76))。

没頭する度合いの大きい人は、時に社会性を欠いた人間になることもあり、そのことに関連してマズローは、「私のとり扱ってきた創造的な人びとは、組織の中で浮き上がりがちで、それを恐れ、一般に部屋の隅や屋根裏で、ひとり働きたがる傾向がある。」(『人間性の最高価値』 p.98)と述べている。

6. 自己実現と仕事・経営

仕事は自己実現を成す上で、最大級の有用性を持っており、多くの人は仕事をする事を通じて何らかの自己実現を行っている。そしてマズローの考える仕事における自己実現とは、仕事で自分の能力を発揮し、何らかの価値ある成果を上げる、という常識的な意味にとどまらない。

仕事と自己実現との関係についてマズローは次のように述べている。「仕事とは「人をして自己実現の欲望を満足させる一種の精神療法である」とも言えよう。」（『自己実現の経営』 p.1）、「仕事によって自己実現をするということは、同時に、自我の追求と満足を得ることであり、また、真の自我ともいべき無我に到達することである。」（『自己実現の経営』 p.7）、「健全な心理的仕事の遂行は人間にとって歓喜であり、魅惑的なものであり、かつ愛されるものでなければならない。自己実現をする者にとって、仕事とは、宣教師的感覚で表現するならば、伝導、天職、宗務、神命と呼ばれるにふさわしいものである。」（『自己実現の経営』 p.27）。すなわち、マズローの考える仕事による自己実現とは、仕事を通して自分を知り、自分の深層部分を自覚し、人間としての喜びを味わうことなのである。

このことからマズローは、マグレガーの言う「Y理論」を支持する（「革新的経営であるY理論的経営が、最も適当であると言うことができる。」（『自己実現の経営』 p.99））。マグレガーは、経営者の従業員に対する見方に2通りあると考え、それぞれX理論、Y理論と呼んだ。X理論では、人間は元来仕事をするのが嫌いで、強制されたり、命令されたり、脅されたりしないと、積極的に仕事をしようとはしない、と考える。Y理論では、仕事で心身を使うのは、遊びや休憩の場合と同様、人間の本性によるものであり、自己実現の欲求が満たされることが、仕事をする事によって得られる最大の報酬となる、と考える（『企業の人間的側面』 pp.38 - 65）。

そしてマズローの考えによれば、経営者や管理者の役割は、従業員の管理・統制をしたり企業の収益性を高めたりすることだけでなく、従業員の満足度を高めたり自己実現を促進したりすることも経営者の役割である（「生産性の良・不良の原因は、結局は管理者という人間に帰結し、有能な管理者のもとでは、一般に、部下は自己実現のために努力し、また、良き指導のもとに向上・進歩するものである。……企業において、従業員がこのように健全化してくると、従業員の欠勤数は減少し、また不良製品も少なくなり、生産性が向上してくると言える。このように、従業員の健全化によって企業に及ぼす好影響はきわめて大きいと言える。」（『自己実現の経営』 p.75））。

このような考え方は理想主義的、楽観的に過ぎるとも言えるであろう。ただ、マズローは、仕事というものが多くの場合協働作業であることを重視する。協働作業においては、

それぞれが自分の担当する仕事において能力を発揮するとともに、他人にも能力を発揮してもらい、互いに能力を補い合いながら仕事を進めていく。よって、1人だけでは発揮できない能力が協働で仕事をする中で発揮される場合もあるし、他人が能力を発揮できたことが自分の喜びとなる、ということも起こり得る。後者に関連してマズローは、「協働についてまず言えることは、人間は他人を幸福にすることができる、あるいは、他人の幸福を自分自身の喜びとすることができる、ということである。」(『自己実現の経営』p.93)と述べている。そして、作業をともにする集団の成員が能力を結集することによって集団の作業目標を達成し、それを成員全員の喜びとすることもできるのである。もちろん、常にそのような状態が生じるとは言えないが、自己実現がたとえ利己的な面の方が強いとしても、仕事においては、利他的に働くことは十分にあり得ると言えるであろう。

7. 自己実現と価値

マズローは心理学という科学に、価値の概念を導入している。マズローの基本的考えは、「科学は、過去においても現在においても完全に客観的ではありえない。少なくとも人間の価値と無関係ではありえないのである。」(『改訂新版・人間性の心理学』p.27)というものである。

通常、学問としての科学では価値の問題は扱わない。しかし、マズローは、そもそも科学自体が1つの価値体系であるとする(「科学は人間の価値に基づいており、科学自体、一つの価値体系である。科学の起源は、人間の情緒的・認知的・表現的・審美的欲求にあるのであり、また科学の目標もそれに基づいているのである。そしてそのような欲求を充足することが、「価値」なのである。」(『改訂新版・人間性の心理学』p.9))。そしてマズローは、科学もまたそうした価値観にもとづいていることを十分に意識し、そのような価値観によって自然や社会、あるいは自分自身に関する知覚が歪曲されないようにすることが大事であると述べている。

さらに、そのことを踏まえながらマズローは人間における普遍的な価値と思われる概念のリストを提示した。それは次のようなものである。

1. 真 2. 善 3. 美 4. 全体性 5. 躍動性 6. 独自性 7. 完全性 8. 必然性 9. 完結性 10. 正義 11. 豊かさ 12. 無礙 13. 遊戯性 14. 自足性 (『創造的人間』pp.122 - 125、『完全なる人間』pp.118 - 119、『人間性の最高価値』pp.158 - 159から構成)

このリストは、マズローが多くの人に自分の至高経験の記憶を思い起こしてもらい、その至高経験で感じたことを報告してもらった記録を整理集約することによって導き出したものである。そしてマズローはこのリストについて、「私たちの感覚がもっとも冴えたときに知覚される世界の特質を記載したこのリストは、人びとが長年にわたって、永遠の真理、霊的価値、最高の価値、宗教的価値とよんできたものと、ほぼ同じである。」(『創造的人間』 pp.86 - 87) と述べている。

マズローの叙述によれば、これらの価値は至高経験という自己実現の営みの中に含まれていたものである。よって、これらの価値を、永遠の真理、最高の価値、などと同等のものであるとするマズローの主張は、自己実現もまた人間にとって最高の価値を持つ営みであることを含意していると言える。

以上のように、マズローは、パーソナリティ、欲求、心的活動状態、教育、創造性、仕事・経営、価値など、多方面にわたるテーマと自己実現との関係性を述べている。もちろん、これらのテーマについてはそれぞれの関連する専門分野において多くの知見が提出されているし、マズローの述べた見解がそれらに優越するものであると言うことはできないであろう。しかしながら、マズローの理論の特色と思われるのは、いずれのテーマにおいても人間の能動的なありさまが描かれていることである。

マズローの記述したパーソナリティ特徴は、自己実現の営みの到達点である。そして、至高経験という心的状態は自己実現の活動に没頭する時に得られるものである。また、教育は自己実現を支援することを使命とするものであり、喜びや美を味わわせることを目標としている。創造性は、心の深層から湧き上がってくるものを顕在化することによって実現される。仕事や経営においても従業者の自己実現が重視される。至高経験という自己実現の営みの中には普遍的な価値が内包されている。

自己実現について、ゴールドシュタインは、「できるだけ十分に自分自身を発揮しようとする傾向は基本的な衝動であって、.....、われわれにはただひとつの衝動、すなわち、自己実現の衝動がそれであると考えなければならない。」(『人間』 p.135) と述べている。またユングは、「原動力となる動因は、..... 主として自己実現への欲動でしかないように思われる。」(『自我と無意識の関係』 p.103) としている。このように、自己実現を駆動する自己実現の欲求は、人間の本性に関わるものであり、人間の行動や生活を突き動かす強い力を持ったものと考えられる。

人間の行動や生活、そして成長発達が環境条件の影響を受けながら、環境に適応するように変化していくという受動的な面があるのは確かであろう。しかしながら、その一方で、

自身の内部に潜在している能力や性質や、心の深層から湧き上がってくる力によって諸活動に能動的に取り組んでいく営みもまた人間には存在する。マズローの自己実現論の重要な特質は、そのような人間の能動的な面を描いている点にあると言えるのではないであろうか。

引用文献

- ゴールドシュタイン, K.(西谷三四郎・訳)(1968). 人間 その精神病理学的考察 誠信書房
〔Goldsten, K.(1947). *Human nature in the light of psychopathology*. Harverd University Press.〕
- ユング, C.G.(野田 倬・訳)(1982). 自我と無意識の関係 人文書院
〔Jung,C.G. (1933). *Die beziehungen zwishen dem Ich und dem unbewußten.*〕
- マズロー, A.H.(上田吉一・訳)(1964). 完全なる人間——魂のめざすもの 誠信書房
〔Maslow, A.H. (1962). *Toward a psychology of being*. D. Van Nostrand Co. 〕
- マズロー, A.H.(原 年廣・訳)(1967). 自己実現の経営 産業能率短期大学出版部
〔Maslow, A.H. (1965). *Eupsychian management*. Richard D. Irwin.〕
- マズロー, A.H.(小口忠彦・監訳)(1971). 人間性の心理学 産業能率大学出版部
〔Maslow, A.H. (1954). *Motivation and personality*. Harper & Row.〕
- マズロー, A.H.(佐藤三郎・佐藤全弘・訳)(1972). 創造的人間——宗教・価値・至高経験 誠信書房
〔Maslow, A.H. (1964). *Religions, values and peak-experiences*. Kappa Delta.〕
- マズロー, A.H.(上田吉一・訳)(1973). 人間性の最高価値 誠信書房
〔Maslow, A.H. (1971). *The farther reaches of human nature*. Viking Press.〕
- マズロー, A.H.(小口忠彦・訳)(1987). 改訂新版・人間性の心理学 産業能率大学出版部
〔Maslow, A.H. (1970). *Motivation and personality*. 2nd ed. Harper & Row.〕
- マグレガー, D.(高橋達男・訳)(1966). 企業の人間的側面 産業能率短期大学
〔McGregor, D. (1960). *The human side of enterprise*. McGraw-Hill.〕